

R.F.C.M Heartful Report

リスク・ファイナンシャル・カウンセリング・マネジメントのハートフル・レポート===

民法・第446条（保証人の責任等）では、『保証人は、主たる債務者がその債務を履行しないときに、その履行をする責任を負う。』となっています。

“履行をする責任を負う”という義務のことを保証債務、義務を負う人は保証人、それは債権者と保証人間で“保証契約”をすることによって発生するものです。

“保証契約”は会社の借入債務などの主たる債務に付従するもので、主たる債務がある限り保証債務は消滅しません。

リーマンショックにより親会社からの発注が大きく絞られ資金繰りが苦しくなってきたところで東日本巨大地震により経営状態が一気に悪化した経営者は、全く返済できる見通しが無くなったと嘆き苦しみ、このままでは一家揃って全員が破産申立をしなければならぬという状況になっていました。

何故ならば、その会社では社長、その妻、専務の長男、サラリーマンだった部長職の三男と、家族が一致団結して事業に取り組んだのがかえってアダとなってしまいました。

設備資金や運転資金として10本の借入金合計で7億円以上になっていて、売上が月々3億円以上だったのが今では月商7千万円位にまで落ち込んで、さまざまなリストラ策も限界になっていました。

将来は息子達に会社を継がせたいと現場に入れてしっかり叩き上げて来たのですが、設備を入れ替えたり、売上減少の穴埋めに借りた運転資金の融資を受けたときに、金融機関の要求するままに息子達を次々に連帯保証人にしていました。

父親が会社を一旦破産させ、息子達が新たな会社を立ち上げて“起死回生”を図ることを考えていたようですが、現状では、妻が1億2千万円、長男が2億円、三男が1億8千万円、社長が借入額と同じ7億円をそれぞれが連帯保証人になっていました。

会社を破産させれば、連帯保証人としての保証債務が負債となってしまうので、家族を新会社の社長にしてスタートすることは不可能になってしまったという

起死回生！「家族を守る経営」の要諦は リスクのクサリ 親族間の保証債務を極限まで減らすこと

のです。その社長は、息子達を連帯保証人にさせてしまったことを悔やんでいましたが気がつくのが遅かったという結果になってしまいました。

保証債務は大元の債務が無くなれば同時に消滅し、大元の債務が履行されている限りにおいては主たる債務とは別個独立の債務です。

主たる債務に約定違反などの事由で期限の利益が消滅など債務不履行になって初めてその補充のため履行する義務が生じる二次的な債務なのです。

したがって、保証債務は主たる債務を担保するものなので、保証債務が有効となるには、主たる債務が有効に成立していることでなければなりません。主たる債務が無効となって取り消された場合は、保証債務も無効となったり消滅したりします。

また、保証債務の契約をする場合、その保証契約が“継続的保証”ではないことを十分注意してください。

これは、一定の範囲内で継続的に発生する不特定（多種類）の債務を、包括的に保証するという保証の形態を“継続的保証（根保証）”といいます。

その保証契約に記載されている金額の範囲内で、融資の貸付金や手形の割引を含むもので保証人が個人であるものを「貸金等根保証」と言っています。

平成17年4月1日より施行され、個人である保証人の保護を図るため、貸金等根保証契約では、“極度額”を約定しない場合は無効となり、5年以内の元本確定日を定めなければならない。定めが書いてなかった場合は3年となり5年を超える確定日を定めた場合でも3年になります。

そのほか、保証人が1人だけの場合には“単独保証”といい、保証人が2人以上いる保証の形態を“共同保証”といいます。

いずれにしても、家族間で安易に保証契約をすることは再起・再生の場面では悩ましい問題ですので、熟慮した上で戦略的な借入計画をすることが大切なのではないでしょうか。



真っ白に熟成した巨大なカマンベールチーズがコロコロと転がりそうに草原の斜面に……。数十個のそれは刈りとられた牧草でした。緩やかな高原の向こうは真綿のような雲をあしらう青空を背景にした那須岳の勇姿と連なる山々。福島県境まで十キロほどのこの高原には「福島原発」の影響は大丈夫だったのだろうか、他人ごとながらいささか気になる……。牧草刈り機で刈りとりながらロールケーキ状にまとめたのが「ロールベール」。重さは約350kgもある。包帯で巻くように梱包機で出来上がったサイレージによってサイロの状態に保たれ醗酵し、冬になって牛たちに食べさせす美味しい保存食となるわけです。

ちょっと歳時記

経営コンサルタント

二見道夫

事業や経営における、発想の柔軟性について掘り下げてみよう。

テレビCMで、「青雲」というお線香のことを知る人は多いと思う。企業名は「日本香堂」。

もちろん「青雲」は、多くのお線香の代表ブランド。

そこであなたにお尋ね。東京銀座に「銀座らん月」という、老舗とも言えるすきやき店がありますが、「日本香堂」との関係をご存じでしょうか。

じつはこの畑違いの両社は、同じ人物が創業している。同一人間の発想(戦略思考)から誕生しているのである。繰り返すが、まるで畑違いの業界なのだ。

しかも、すでに両社の経営歴は、とうに老舗の領域に入っている。創業時の発想も、経営(組織運営)の発想も、視野が広く、運営の妙を心得た柔軟性がなければ、到底成功できない話ではなからうか。

ここで、こういう畑違いの創業や経営の話を持ち出したのには、もちろん理由がある。

こういう企業の意志決定権者の頭の働きの、「非常に柔軟性がある」からである。私は、農水省の依頼を受け、米穀業界を十年以上見てきたが、食糧法廃止後も生き残り成長を続けている組織を見ていて思ったことは、経営トップが畑違いの業種の経営に、成功している人が多いという点で、日本香堂(銀座らん月)に通じているからである。

たとえば、愛知県の犬山地域で、独壇場に近い市場制覇を成し遂げている米穀問屋は、タクシー会社も経営し、通信販売でも成功している。

単独業種の経営者に比べると、視野は比較にならないくらい広い。

単独経営者とは会談中に、ミュージカルや緑のカーテンに脱線すると、途端に会話が行き詰まる人が多いが、畑違いの業種に通じている経営者は、ちやんとスムーズな会話が継続できる。

単独経営者の情報が、一般に〈線〉であるのに比べて、複数業種の経営者には、〈面〉の情報が感じられるのである。面の情報とは、ニュース性がある、ということ。

ニュースはNEWSと書くが、語源はN北、E東、W西、S南から来ている。順番を入れ替えると東西南北となる。つまり、関心と興味が四方に働く、マルチチャネラー型なのだ。

たとえばマルチチャネラー人間といえば、カップラーメンを発明した、安藤百福さん(日清食品の創業者・故人)が、まさにそういう人だった。

この安藤さんは、何もカップラーメンだけに成功した人ではない。安藤さんは、元々台湾の人で、東洋莫大小(めりやす)という、メリヤス専門の商社で大成功したり、その成功の勢いで大阪にも会社を作り成功している。戦後の経済政策の生け贅にされる格好で、このビジネスに終止符を打ったが、この安藤さんなどは、まるで好奇心のカタマリだった。

「街の街頭売りに人が集まっていると、必ず覗きました。説明を聞いただけで、理解ができないと質問しました。質問してなお詳しく知りたいときは、商品を手にとって見ました。見ただけで興味が満たされないときは、買って帰りました」

これは安藤さんの、マルチチャネラーぶりを物語る逸話だが、こういうマルチチャネラーぶりは、大いに見習いたいものだ。

金沢の兼六公園をはじめ、各地の公園では冬を前にして、樹木に「雪吊り」を施す。もはや冬の風物詩にさえなっていることは、ご承知のとおり。

ところが枝をよく見ると、大きな枝に綱が結わえてある。

細い小枝はそのままである。小枝は雪が積もると、枝がしななって雪が滑り落ちるから、折れないのだ。

一見頑丈に見える大枝は、しななることができないから、吊って支えるのである。経営でも、初志貫徹の鉄の意志は大事だが、同時に雪吊り同様に支える必要もある。

「しなやかさ」という意味は、柔軟性や創造(独創)性と考えればよいと思う。

その、柔軟性や創造(独創)性こそ、〈面〉タイプの情報が根源になっているものだ。

ところであなたは、映画好きですか。ミュージカル好きですか。疑問が湧くとネット調べでキーを叩きますか。レンタルビデオで、懐かしい映画で往時を偲びますか。

こういう趣味の生活も、柔軟性やしなやかな発想力の原動力になっているように思う。

なお単独事業の成功者にも、〈面型情報〉の経営者がおいでなのは当然である。

東日本巨大地震の3月11日から早くも3ヶ月が過ぎた。

毎日のように放映される被災地の様子に瓦礫の中

にいるかも知れない家族を探す人々の姿は胸を締め付けられる思いで祈りの気持ちを送るしかない。被災地の瓦礫の中や海中深く呑み込まれたかも知れない行方不明者の人数は**6月16日現在7718人**と未だに7千人を超えている。

かくいう筆者の義弟もヒマラヤのナンダカート峰の頂上付近で深夜の雪崩に遭遇し7人のメンバーがテントもろとも雪崩に埋もれ、未だに帰宅しないまま行方不明の

ままであり、ザックを背負った大きな男の後ろ姿を見ると「もしや?」と目線を凍らせることもある。

遠くから眺める氷山に眠る遺体と違い、同じ町の何処かに居るはずだと確信しつつも遺体を見つけれない親族にとって、その辛さはひとしおのものと思います。

一言で行方不明者といっても、人災。天災などの災害による場合、自らの意思により身を隠す場合、他人の作意によって行方が分から

なくなる…と分類できますが、その状況から、生存不明、蒸発、失踪と言うようにも分類されています。

政府発表による北朝鮮に拉致された日本人の人数は12件、拉致被害者は17人となっていますがその真偽はわかりません。

、驚くことに、近年の調査で日本人の年間行方不明者数は10万人を超え、8割以上は女性であり、その4割13才以下の女性だということです。

被災地の方々の一日でも早い復興の日を願い、行方不明者の発見が出来ることを祈っています。

建物を守る重要な部位「屋根」の大切さ

不動産コーディネーター 豊田 泰由

建物は地盤と土台の強度、建物景観を決める外壁材、建物の耐久性に重要な躯体(柱と壁)と屋根によって構成されていますが、中でも、高所にあることから普段は目につきにくい「屋根」はかなり重要な部位だといえます。

台風などの激しい風雨、極寒地の重い雪と灼熱の陽を受ける寒暖差など、私たちが快適に暮らす上においても、建物の寿命を左右するのが屋根なのです。

屋根は、屋根材(瓦等)、下地材、断熱材により構成され、屋根材は「粘土系」「スレート系」「セメント系」「金属系」と大別されていますが、最近の太陽光パネル電池による新商品も徐々に普及しています。

また、屋根が重要であるのは、耐震性に強い高性能の素材と施工性によっても耐久性が高まるのと同時に、耐火性に優れていることや正しい構造設計に基づく施工により落下しにくい屋根材を選択することも重要になってきます。

さらに、近隣火事からの類焼を受けにくい不燃性屋根材であっても、屋根材と屋根材の隙間から火の粉が侵入して躯体に燃え移ることも心配です。

台風の季節になると心配なのが屋根からの浸水です。浸水している箇所を見つけにくいのが専門家の悩みです。浸水を放置しておくくと建物はどんどん朽ちていきます。



「たかが屋根葺き、されど屋根葺き」屋根工事は経験豊かで信頼のおける屋根工事会社に任せましょう。

認知症予防・新書

NPO法人 認知症介入指導協会 理事 清輔喜美男
<http://www.ninchisho-yobo.jp>

脳の迷信

世界的に脳に対する関心が高まったのは1990年代に入ってからだ。「脳に関する不確かな情報は英語圏では『神経神話』といわれるが、私は『脳の迷信』と名付けた。

たとえば「モーツァルトを聴くと頭がよくなる」「病は気から」「速聴は右脳を鍛える」などです。「ゲームは脳のトレーニングに直接的な実害はないかもしれない。しかし、効果が不確かなのに、施設などでこれを使って、なかば強制的に学習させられている『認知症患者』がいる」「一般の人なら効果が無ければ、しなければいいのだが、自分で選べない人がやらされている」藤田教授が「脳の迷信」の代表格として取り上げるのは「脳を鍛えるゲーム」だ。

「簡単な計算問題を速く解いているときに、前頭葉を含む広範囲で血液量が増えたとしている。しかし、脳科学の現場では血液量が増えたということは、前頭葉が活動したということであり、脳の機能が向上したということには必ずしもならない」「米国や英国においても、「効果があるとの結論を引き出すのは困難」という疑問の声が脳科学者から次々とあがっている」サプリメントにも効果が証明されていないものが数多くある。

ガンマアミノ酪酸の略号で、抑制性神経伝達物質の代表である「ギャバ(GABA)」がその一例。チョコレートやお茶、お酒など様々な商品が出ている。「これらのものを口から食べても、脳の神経細胞に届く前に、「血液脳関門」というチェック機能に阻まれるし、もし届いたとしても、神経伝達物質のやり取りを行なうシナプスにまで到達する可能性は極めて低い」「残念ですが、頭がよくなる食べ物などはこの世にありません」

「脳のメカニズムは、まだまだ不明というのが、現状での正しい答えです。わかっているのはあくまで神経伝達物質のやりとりや、ナトリウムイオンの流れなど、物理化学的なことだけです。

「暖かい」「うれしい」など知覚や感情が、どのようにむすびついているのか、まだまだわかっておらず、永遠のテーマです」

(大阪大学大学院生命機能研究科教授 藤田一郎)



World Now



東日本大震災をきっかけに、家族や友人、地域社会とのつながりの大切さを再認識しました。また、被災地の苦勞を尻目に首相交代に躍起になっている政治家を見るにつけ、政治の大切さも痛感します。私たちの幸せにはやはり人が人を想う気持ちが欠かせないのだと思います。

しかし思いだけでも幸福にはなれないようです。

今月は、国民の幸福度合いを数値化しようという試みをご紹介します。

左のグラフはエコノミストという経済誌のブログで紹介されています。(http://www.economist.com/blogs/dailychart/2011/05/well-being_and_wealth)

元の数値は、定期的に経済見通しを発表しているOECD(経済協力開発機構:国際的な経済状況を協議するために設立された国際機関。加盟国は先進国中心。)のWebサイト(http://www.oecd-betterlifeindex.org/)で公表されています。

グラフの片方の軸である幸福度指標は、住宅、収入、仕事、地域社会、教育、環境、統治、健康、生活満足度、治安、ワークライフバランスの11項目を数値化したもので、加盟国34か国の値を比較できるようになっています。

グラフには載っていない個別評価のほうを先にご紹介しますと、日本は、住宅では34か国中23位、収入では8位、仕事では12位、地域社会でも23位、教育では4位、環境と統治でも23位、健康では25位、生活満足度では28位、治安では1位、ワークライフバランスでは32位となっています。

グラフからは、GDPと国民が感じる幸せの度合いは相互に関係していることがわかります。ひとりあたりのGDPが大きければ大きいほど幸せを実感しているといつて良さそうです。

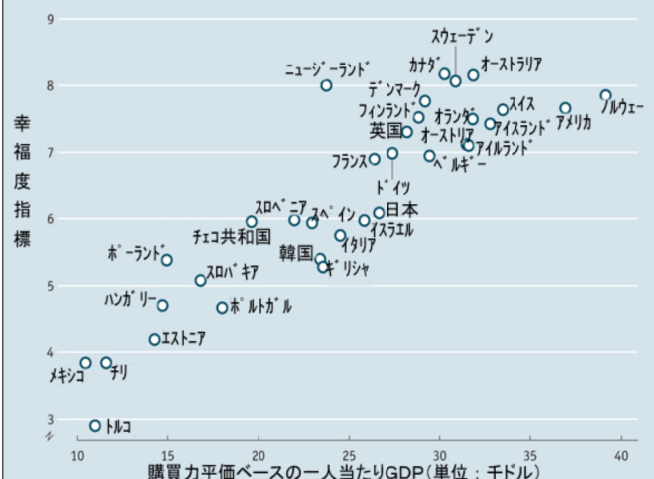
もちろん、GDPだけで幸福度合いが決まるとは思いませんが、やはり経済的豊かさがあるのははじめて、障害のある方や被災して困窮している方などを国として助けたいけるということではないでしょうか。

被災地に赴き瓦礫の撤去などを手伝うボランティア活動だけが被災者を救う方法ではないと、あらためて思いました。

各々の仕事に励み、経済を活性化し、生産をあげることも、復旧復興に貢献できるのだと思います。弱者を切り捨てずこすむ方法を採るためにできることは、身近にもあるのではないでしょう

幸せと経済力の関係

OECD 幸福度指標と一人当たりのGDP(2009年*)



目先の経済性や、自分だけの利益を追求している現代社会の中には、経済性という大義名分を振りかざした侵略的で略奪的な経済活動をしている企業をしばしば見る場面があります。

物事を知らない人を誘惑するようにして巧みに甘言をあやつり、あたかも人の懐中深く手を差し入れて奪い取るようなビジネスがあります。

プロの世界にシロウトを引きずり込み、寄って集ってむさぼり喰い尽くすようなことは、まさに人間としてルール違反なあるまじき事ではないでしょうか。

それを指摘された彼らは、リスクがあることは十分に説明したと居直る者が多いが、時には政治家をも操るようにして社会のルールさえも変えてしまう巨大企業は、私には“略奪的資本主義者”“侵略的資本主義者”と言えるように思うのです。

そこには将来に向けた利益の源泉ともいえる“甘い利権”があり、その利権を前にして鬼気として対立しながらますます巨大化していくのですから尋常だとは言いがたいとおもいます。

目先の利益、自分だけの利益を追求する事業者には小さな命の弱者を守るという姿勢は、なかなか見つけ出すことが出来ないのは残念なことです。

一方では、社会の弱者から眼を背けることなく、一つのモノを多くの人で“分かち合う”ことを自然身につけた人々は、“譲り合うこと”の大切さを誰よりも深く知っています。

それは“共生的資本主義”とでも言えるものであって、もちろん独り占めすることもないし、人のモノを奪い取ることもしない。与え合い、供出することによ

て社会を築きあげていこうとする社会ではないでしょうか。

他社のノウハウを盗み出す行為を平然と行っておきながらそこから大きな利益を独占していたりするのは、心が痛むあるまじき行為です。

日本にいる人々が、そして企業が…、相手をおとしめるための行為ではなく、社会の弱者を守るための智恵や資源を出し合う社会こそ、これからの日本に求められているのです。

中小零細企業から発信される数百万、数千万の叡智とパワーは、共生的資本主義の発想の中で培っていくことによって、共生と自立のバランスを取りながら日本の経済をジワジワと活性化してゆくことになるでしょう。

原発問題や腐りかけの政治に、津波に町ごとさらわれた東北三県の殺伐とした景観は、人々の心までも荒れさせてしまっているようで、あの緑豊かで美しかった海辺の町を、一刻も早く心とむ人情味豊かな町へと復旧・復興させるのは自分の全ての利権を捨て去った公人としての政治家によってのみ出来る事業3なのではないでしょうか。

我を捨て、自らが先頭に立って突き進むという大胆なことは出来なくとも、小規模経営者の一人ひとりがしなければならないのは「家族を守る経営」であり「社員を守る経営」に他なりません。

そのためには、日常的に“心”を豊かにしていることが大切なので、辛いとき、苦しいときは一人で堪えずに、リスク・カウンセラーに相談してみましよう。

仕事のことで、プライベートのことで、自分の内に閉じ込めないで話すことで解決できることがきっとあるはずですよ。

経営者には、経営者の辛さを知るカウンセラーが強い味方になることだと思います。

21世紀は心豊かに…For You!



『経営危機から家族を守る!』のしおり

このキーワードは、リスク・カウンセラーが小規模経営者に向けて訴え続けている永遠のテーマです。

- ①正しく“家訓を守り”承継できる会社経営をめざす経営者
 - ②急成長したのに資金繰りに行き詰まり再生に挑む経営者
 - ③長引く経営不振に決断が先送りになり迷走している経営者
 - ④不慮の事故により経営が危機的状態となった経営者の家族
 - ⑤企業再生が失敗に終わり“起死回生”に向けて頑張る経営者
- “万が一”の経営危機を回避するには日頃からの備えが必要です。

富貴への道

再生・再起への道

起死回生への道

◇発行者
 ◇責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野 孟 士
 ◇連絡先 〒113-0033 東京都文京区本郷 1-3 5-1 2
 TEL. 03-5684-0021 FAX. 03-5684-0031
<http://www.holonics.gr.jp>
【ホロニック】
 (英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。
 すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態を言う。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する (小学館「カタカナ語の事典」より)